

キリスト教と英米文学(二)

——カールライルの精神の神髄——

森 谷 峰 雄

三、永遠の肯定 (The Everlasting Yea)

〔内容〕 荒野の誘惑、誘惑者への勝利、自己の滅却、神への信仰と人への愛。悪の起源、新しく解き明されるように常に要求する問題、トイフェルスドレックの解明。幸福への愛は空しい気まぐれ、幸福への愛よりも人の中のより高尚なもの。永遠の肯定。悲しみの崇拜。ヴォルテール、彼の仕事は今や終了した。確信は行動がなければ無価値、不可能である。真の理想、現実、起きて働け！^④

‘TEMPTATIONS in the Wilderness!’ exclaims Teufelsdröckh: ‘Have we not all to be tried with such? Not so easily can the old Adam, lodged in us by birth, be dispossessed.’^⑤

（「荒野の誘惑！」とトイフェルスドレックは叫ぶ、「我々は皆そのようなもので試みられなければならないか

？ 生まれながら我々の中に宿ったあの古いアダムをそんなに容易にかたずけることはできない。）

「荒野の誘惑」とはキリスト・イエスがヨハネより洗礼を受けた時、聖霊を受けて後、荒野に追いやられてそこで四〇日間、サタンの誘惑に会われたが、これに勝つ話である。聖書では福音書にこの記事が出ている。たとえばマタイ伝四章一―十一。これを題材にした作品に、ミルトンの『復樂園』がある。ここに一貫して流れているのは神への徹底的な信頼、サタンへの徹底的な拒絶である。確かに、特に回心を経たものは荒野の試みに会って、これを克服しなければならぬ。この世のものをこの世に返し、神のものは神に返すことを実行する。しかも一回だけではなく、何回となく試みに会わされる。その度毎に古いアダムは死に、キリスト・イエスにあって新しく生きる。罪に死に、神にあって生きる。現しみの身には古いアダムが滅んでも又生きてきて、我らを悩ます。古いアダムは執拗に我らを罪へと駆り立てる。それが原罪の重い刑罰である。聖書に次のように言われている。

聖書に「最初の人アダムは生きたものとなった」と書いてあるとおりである。しかし最後のアダムは命を与える霊となった。最初にあったのは、霊のものではなく肉のものであって、その後に霊のものが来るのである。第一の人は地から出て土に属し、第二の人は天から来る。この土に属する人に、土に属している人々は等しく、この天に属する人に、天に属している人々は等しいのである。すなわち、わたしたちは、土に属している形をとっているのと同様に、また天に属している形をとるであらう。

兄弟たちよ。わたしはこの事を言うておく。肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちな

いものを継ぐことがない。(コリント前一五の四五—五〇)

この古い人間から新しい人間に生まれ変わることがあつてはじめて眞の人生を得る。しかし、これは容易ではない。戦いがある。何故なら、人生の意味は自由であるのに我々は必然性に囲まれているからである。この体も必然である。“God given mandate”と“Man given mandate”とは相容れない。それが誘惑の原因となる。しかし、誘惑者が敗北するまで戦わなければならない。このような誘惑に我々は皆、呼ばれている。

Name it as we choose: with or without visible Devil, whether in the natural Desert of rocks and sands, or in the populous moral Desert of Selfishness and baseness, — to such Temptation are we all Called.^⑨

(それをどのように呼ぶとも、目に見える悪魔が居ても居なくとも、岩と砂の自然の荒地あるいは利己主義と卑わいの人が住んでいる道徳的な荒野に於いてであつても、我々は皆そのような誘惑に呼ばれているのだ。)

この荒野の誘惑に勝つて我々は生半可の人間(Halfman)から脱し、すべての敵を鎮めて眞の太陽の輝きの中で輝き出る人間となる。我々の荒野は無神論の時代の広い世界であり、四〇日は苦難と断食の長年である。あるいは一生であるかも知れない。しかしこれにも終りが来る。

彼は偽りの希望の影を追いやる。又恐れも追いやる。彼は偽りの希望を追わず、幽霊のような恐れを信じなくなった。しばらく彼は眠る。目覚めてみると彼は新しい天と新しい地を見つける。そして自己滅却 (Annihilation of Self) が達成されたことを喜ぶ。彼の目は開け、手は萎えていたのが直った。彼は目覚めた所から周囲に見をやろ。

Beautiful it was to sit there, as in my skyey Tent, musing and meditating; on the high table-land, in front of the Mountains; over me, as roof, the azure Dome, and around me, for walls, four azure-flowing curtains,——namely, of the Four azure Winds, on whose bottom-fringes also I have seen gilding.^⑤

(そこに座すことは美しかった。私は空のテントの中にいるように物思いに耽ったり、瞑想をしたりした、高い台地の上で、山脈を前に。私の頭上に、屋根のように淡青のドームが、私の周囲に壁として四つの淡青色に流れるカーテン——即ち、四つの淡青の風、その底の外辺の土でも輝いているのを私は見たことがある——があった。)

トイフェルスドレックは今、世界各地を旅行して、ある高台の上で休息しているのである。サタンの力、即ち、この世の勢力に負けず、真理の如何なるものであるかを本当に知り得た彼にこの世の力は抗すことは出来ない。永

遠の肯定とはかかる世俗性を否定することであつた。青年期の探求はここにある。今、筆者はこの箇所を読み彼の青春時代が再び訪れたように思える。

And then to fancy the fair Castles that stood sheltered in these Mountain hollows; with their green flower lawns, and white dames and damosels, lovely enough: or better still, the straw-roofed Cottages wherein stood many a Mother baking bread, with her children round her: — all hidden and protectingly folded-up in the valley-folds; yet there and alive. ③

(山脈の谷間に隠れて立っている美しい城を空想する。緑色の花の芝生、色の白い貴婦人や乙女、本当にかわいい。あるいは、もつとよいもの、わらぶきの小屋があり、その中に多くの母親がパンを焼き、子供達が周りに遊ぶ——全部谷間のくぼみの中に隠れ、保護するようにたたまれている。それでもそこで生き生きとしている。)

ここにカーライルの人間性が現われている。自然の景色よりは人間の生活、それも貴族社会よりも、平民の日常生活に彼の心は暖かい気持を寄せている。内村鑑三は“intensively divine”(強く神的である)と同時に“intensively human”(強く人間的である)のが真のキリスト者の姿であると言った。我々が人道性とか人間性を説く前に、神への信仰、神の愛を感じることを説かねばならない。社会の本当の進歩はかかる信仰と人間性を持つ多くの

人々によってなされる。人間性はキリストへの信仰として現われている。我々はこの人間性を皮相にとらえるのではなく、むしろ、宗教的感情と考えるべきであるのだ。ここに見られるのは人生の肯定である。永遠の否定を通じて来た肯定であるだけにその意味は深く大きい。

Or to see, as well as fancy, the nine Towns and Villages, that lay round my mountain seat, which, in still weather, were wont to speak to me (by their steeple-bells) with metal tongue; and, in almost all weather, proclaimed their vitality by repeated Smoke-clouds; whereon, as on a culinary horologe, I might read the hour of the day. For it was the smoke of cookery, as kind housewives at morning, midday, eventide, were boiling their husbands' kettles; and ever a blue pillar rose up into the air, successively or simultaneously, from each of the nine, saying, as plainly as smoke could say: Such and such a meal is getting ready here. Not uninteresting! ⑨

(あるいは、空想するのと同じく、九つの町や村を見る―それは山の見晴し床の周囲にあり、静かな天候には教会の尖塔の鐘によって金属の言葉で以って私に語りかけたものであった、そしてほとんどどんな天候でも、再三再四煙の雲を噴出しては人々の健在を示した。それによって、台所の時計を見るように、私は一日の時間を読み取った。というのはそれは料理の煙であつたからである。忠実な妻が朝な夕なに彼女らの夫のかまを沸とうさせていた、そしていつも青い柱が続け様に又は同時に、九つの各々の町や村から立ち登り、煙が語り得

る程明らかに、かくかくしかじかの料理がここで準備されていますよ、と語った。本当に興味深いことだ！

彼は一八二五—二六年（彼の三〇—三二歳）にかけて Hoddam Hill の農場に滞在していた時に、永遠の否定に継ぐべき靈的体験を行った。これによって、先の体験が完成される。それはキリストの恩寵・普遍的愛が強く出ていることに見られる。ここに描かれる田舎の風景はこの村ホッダム・ヒルのおもかげを伝える。C・F・ハロルドと言う人はホッダム・ヒルと「永遠の肯定」を直接結びつけることはできないとキャンベルは書いているが、これは後の研究に譲るとして、唯言えることは哲学は力になり得ない、カーライルを動かしたのは生きている神であって、決して、一種の哲学ではないということである。

このホッダム・ヒルでの一年の生活は彼や彼の家族にとって生涯の最も愉快な時期であった。父親ジェイムズ、母親マーガレット・エイドケンそれに弟達も共に農場で働いていた。しかもそれに加えて一年後には彼の妻となるべきジェーン・ウェルシュも彼の家で長く滞在していた。彼の永遠の肯定に力を与えたのはほかならぬこのジェーンであった。⑧ アダムにイヴが与えられたように、カーライルにもウェルシュが与えられた。男性にとってよきものは理想の女性であることが言えるのはかかる関係にある彼らの場合である。カーライルのホッダム・ヒルの時期は一七六六年、ミューリゲンで農業生活していたペスタロッチに比較できるものと思われる。

石田憲次は永遠の肯定が「即時即刻電撃的なものでなくして、徐々に、漸次的で、知性的なものであった……したがって旧き自己の燃焼も低温裡に行なわれ、その余燼灰が残存する可能性もまた示唆せられる。そしてわたしは、カーライルに残存した旧き自己こそ、彼の支配欲、彼の帝国主義的天分ではなかったかと推測するのである。」⑨

と言う。彼は或いはカーライルを本当に理解し得なかったのではなからうか。或いは彼は回心の事実を知らなかったのではなからうか。一度火の洗礼を受けた後に二度と同じような火のような回心は起こらない。後に来るのは静かな平和である。この平和こそ、永遠の肯定の実体であるのだ。石田憲次ですらこのような珍解釈をして恥はないのか。少し、筆者には腹立しいことである。尚、彼は『英雄崇拜論』がカーライルの支配欲を示すとしている。

カーライルのこの箇所を読んで読者は著者に心の平和が回復されていることに容易に気付くであらう。人間の世の中を汚れない純粹の眼で見るとき、そこに神の祝福が限りなく降っていることに気付く。彼の象徴哲学—*natural supernaturalism*—がこの情景に表わされている。生あるもの、否、無生物までも神に対して賛美の歌を奏でている。楽園はここにある。フランスのバルビゾン派の画家、ミレーの描く絵画はこの世界を描いたものである。彼の魂に宿る神の祝福が絵に表われている。単なる働く農民の姿でない、そのまま天使となり得る高貴な、威厳のある姿である。これこそ永遠に肯定すべき世界であると言える。特に共感をそそる描写は村々から煙が出ているところである。ミレーもこのような場面に会うと心が騒ぎ、感動にとらわれたことであらう。この情景と『田園生活』のそれと類似が大きいであらう。しかし、類似も大きいが相違も大きいであらう。前者はイエスがニコデモに言われたような二度生まれの人の世界であり、後者は肉内的な自然性の世界である。

自然はいつも暖かくて穏やかではない。トイフェルスドレック氏はシュレックホーン山が黒い嵐に襲われるのを見る。恐ろしい程青かった山の周りに、うずまき雲が集まり、けたたましくうずまき、狂乱した魔女の毛のように流れ降る、終に、しばらくすると、山の姿は消える、そして、澄んだ日光の中で、シュレックホーンは恐ろしい程白く微笑して立っている、それは雲が雪を降らしたから。この瞬間的な自然の変容に彼は心を打たれて自然に驚嘆

を發する、「オウ、自然よ、汝はその偉大な発酵の容器と大氣、世界の實驗室の中で如何にして発酵し、苦心して作ることが／」。しかし、ここで彼は靈感に打たれたように、思想のひらめきを得る、

— Or what is Nature? Ha!

why do I not name thee God? Art not thou the "Living Garment of God"? O heavens, is it, in very deed, HE, then, that ever speaks through thee; that lives and lones in thee, that lives and lones in me?^⑤

(そうでなければ、自然とは何か? ハッ! 汝を何故神と名付けないのか? 汝は『神の生きている衣』ではないのか? オウ、本当に、それは汝を通して常に語る彼であるのか、汝において生き愛する者、私において生き愛する彼であるのか?)

ここに、彼は自然を通して一条の光、神の愛を直観した。「單に相対的なものの中に潜在している神的本質を知覚したことが、人間性の弱さに新しく、しかも無限の価値を与えることになった。魂の中に憐れみと愛が揺り動かされている。」とL・カザミヤンは言う。これは今後彼にあつて發展していく主題である。自然は器械仕掛のようなものでなく、生きた衣裳を表わしている。それを鬼薨氏は比喩を表現する、

Sweeter than Daypring to the Shipwrecked in Nova Zembla; ah, like the mother's voice to her little

child that strays bewildered, weeping, in unknown tumults; like soft streamings of celestial music to my too-exasperated heart, came that Evangel. The Universe is not dead and demonical, a charnel-house with spectres; but godlike, and my Father's!

(ノヴァ・ゼンブラで難破した者に対する夜明けよりも甘美に、アア、知らない騒音の中で泣いている道に迷つて当惑している小さな子供に対する母親の声のように、余りにも悪くなった私の心に対する柔らかい天の調べの流れのように、あの福音がやって来た。宇宙は死んで悪魔によるものでなく、幽霊の出る納骨堂でもなく、神にふさわしく、私の父親のものだ。)

この度、彼の魂は天よりの甘露、聖霊を受けたと思われる。彼はそれを「福音」と呼んでいる。一条の光に照らされたのである。宇宙は慕わしく、神様のものであるとの実感が湧いて来た。この心を以って人間を見る時、彼は人類に無限の愛情を覚える。

With other eyes, too, could I now look upon my fellow man: with an infinite Love, an infinite Pity. Poor, wandering, wayward man! Art thou not tried, and beaten with stripes, even as I am? Ever, whether thou bear the royal mantle or the beggar's gabardine, art thou not so weary, so heavy-laden; and thy Bed of Rest is but a Grave. O my Brother, my Brother, why Cannot I shelter thee in my

bosom, and wipe away all tears from thy eyes!——Truly, the din of many-voiced life, which, in this solitude, with the mind's organ, I could hear, was no longer a maddening discord, but a melting one; like inarticulate cries, and sobbings of a dumb creature, which in the ear of Heaven are prayers. ③

(他の目でも又私はその時仲間の人間を見ることが出来た。無限の愛、無限の憐みを以って。かわいそうな、さ迷う、不定な人間よ！ 汝は疲れて、正に私がそうであつたように筈で打たれなかつたのか？ たとえ汝が王衣を身にまといようと乞食のギャバを身にまといようと、汝はそんなに疲れ重荷を負っているのではないのか？ 汝の休息の床は墓に過ぎないのだ。オウ、我が兄弟よ、我が兄弟よ、汝を我が胸に隠して守り、汝の目から全部の涙を取り去ってやれないでおれようか！ 真に、種々多様な人生の声の騒音は、この孤独の中で、心の器官で聞えるが、それは最早狂気じみた不和でなく、融和する声である。発音がはっきりしない泣き声やおしのすすりなき——それは天の耳には祈りの声である——のような。)

ここにカーライルの心が素直に聞くことが出来よう。思えば人類はすべて哀れである。しかし、この感覚は真理の敵と戦っている者にしか解され得ないであろう。大小の権力者はほしのままに権利を濫用し、真理に歩む者をこぼたんとする。預言者ヨハネがヘロデに首をはねられたのを知ったイエスはひとりで寂しい所に行かれた。パリサイ人、律法学者、祭司長達との戦いに加え、権力者の傲慢さを考えると、イエスは自分を慕う善良な人々を深く愛されたであろう。「イエスは舟から上がって、大ぜいの群衆をこらんになり、彼らを深くあわれんで、そのうちの

病人たちをおいやしになった」(マタイ一四の十四)。今カーライルが感じた人類への愛は程度の差こそあれ、イエスの愛と同じであろうと思う。O my Brother, my Brotherと、人類に呼びかけるのは、自分が高い所にいると自覚するからではなく、自分も彼と同じ罪を犯し悩み悲しんでいるからである。そういったことを次に書いている、

The poor Earth, with her poor joys, was now my needy Mother, not my cruel Stepdame; Man, with his so mad Wants and so mean Endeavours, had become the dearer to me; and even for his sufferings and his sins I now first name him Brother. Thus was I standing in the porch of that "*Sanctuary of Sorrow*", by strange, steep ways had I too been guided thither; and ere long its sacred gates would open, and the "*Divine Depth of Sorrow*" lie disclosed to me.^③

(乏しい喜びしか持たない貧しい大地はその時私の貧しい母親であって残酷な継母ではなかった。人類はそんなに狂気じみた欠乏とそんなに卑しい努力をしているが、私にはそれだけより親しくなった。正に、その苦しみと罪の故に初めて私は汝を兄弟と名付けた。かくして、私はあの「悲しみの聖所」の玄関に立っていた。不思議な、険しい道によって私も又そこに案内された。そして、まもなく、その聖なる門は開き、「悲しみの神神しい深淵」が私に現わされた。)

ここにカーライルの人類を自分の仲間であると考え、同情的・謙遜な心情が現われている。彼自身、世の悪、偽

りの価値観と戦い、それに打ち勝ち、天来の慈雨に触れ、新たに目を開かされて、この世を見たのである。これを工藤氏は「トイフェルスドレックは万人の心と心とを結ぶ精神の共和制に達した。それはさながら一つの教会である。人はそこで唯一の神の御名を讃えることにより、離れがたく相互につながる。」と述べる。かくして、彼もイエスの心に触れることが出来た。

「悲しみの至聖所」(“Sanctuary of Sorrow”)は故土居光知氏の注によると、ゲエテの小説 *Wilhelm Meister Wanderjahre* の十章に出てくる。「ゲエテは敬虔の情に三種あることを説き、第一は自己以上のものに対する畏敬の情で、第二はその神聖なる力が自己の周囲の者にも働いているを感じるが故にそれ等に対しても敬虔の念を持つこと、第三即ち最後の宗教は自己以下のもの或は、罪、悩み、悲み等をも至善を進める神聖なるものとしてそれに対する深い敬虔の念を持つことであるとした。この第三をカーライルはゲエテ論に於いて悲哀の聖所と呼んだ。」^⑧ 悲哀の崇拜こそキリスト教の極意とするカーライルが如何なる意味でキリスト教を信じないと言うのか。彼の思想については反論の余地があるが今は言わない。このゲエテの宗教観は内村鑑三にも引用されている。「悲しみの神々しい深淵」(“Divine Depth of Sorrow”)は同様に土居氏の注によると、「ゲエテは更に次の章に於いてこの宗教は基督の生活を模範して尚ぶのみならず、彼の悩みと死に対して一層深き敬虔の心を持つが、「悲哀の神々しい深淵が隠されている十字架上の悩みの如き神秘を説明したり論議したりするは冒瀆であると述べている」^⑨。誠に、かかる精神を知る者は世に幾許ぞ。すべての者はバリサイ人、律法学者、サドカイ人の類ではないか。かくて、ゲエテがカーライルに永遠の否定から永遠の肯定へと橋渡しをしたと考えるのである。」

四 幸福と祝福

ここでトイフェルスドレック氏は今まで彼を窒息させていた「結び目」に始めて目をやり、直ちにそれをゆるめることが出来、自由になった。悪の起原に関する果てのない空しい論争は、この世の始めから万人の魂の中に發する、と言う。人間の不幸はその偉大性から生じる、何故ならば、どんなに工夫しても、定限の中に完全に埋めることが出来ない無限が彼の中に存在するからである。人の欲望には限りがない。「我々の日光には常に黒点がある」(“Always there is a black spot in our sunshine”^⑤)。黒点とは、「我々自身の影」(“Shadow of Ourselves”)である。

我々が幸福であると思っているものは氣紛れである。自分自身の計算による評価と平均によって、これこれのものが自然と自分のものであると空想する。それは我々の賃金、価値の単なる支払いであって感謝も文句も出ない。見積りよりも過剰を幸福とし、その不足を惨めとする。然る故に「人生の分数は分子を増やすことでなく分母を減ずることによって価値に於いて増加され得る」(“the Fraction of Life can be increased in value not so much by increasing your Numerator as by lessening your Denominator.”^⑥)。彼は数学の考えを人生の問題に応用している。分母を零にすれば分数は無限となる。即ち、賃金の要求を零にすると、人は世界を足下に置くを得る。欲望の放棄によって始めて人生が始まると言つてよい。カーライルはエジンバラ大学時代に修得した科学の知識を一生記憶し、科学に対する興味も失わなかった。ジョン・ティンダルは晩年のカーライルに科学精神を見出し出している^⑦。この科学の精神がここに今出ているのである。

何事も死ぬ気になつてすれば成し得ると世事にたけた人は言う。今迄嘆き、苛ち苦しんできたのは何故か、それは自分が幸福ではなかつたからか？ 皆から尊まれ愛育せられ柔らかいベッドに眠りやさしくいたわられることがなかつたからか？ かわいそうな奴よ！ 自分が幸福であらねばならぬ立法があるのか？ しばらく前は全く存在する権利もなかつたくせに。

しかし、幸福よりも更に良いものがある。それは祝福である。「人間には幸福への愛よりも更に高いものがある、彼は幸福なしに生きていける、幸福の代わりに『祝福』を見い出すことが出来るのである！ ("there is in man a Higher than Love of Happiness, he can do without Happiness, and instead thereof find Blessedness.")」この祝福を説くために、聖人や殉教者、詩人や牧師がいつの世にも語り苦しんで来たのではなかつたのか？ 生涯を通して死を通して、人間の中にある神々しいものの証をし、この神々しいものにあつてのみ人は力と自由を得る。汝もその神が靈感を与えた教義を教えられ、多くの憐み深い患難で希望を失われ、終に悔い改め、それを学ぶことを許されたのだ！」と氏は感極まつて叫ぶ。まことに、パウロが言つた如く「あらゆる悪は彼にとって益となつた」のである。氏は自分の過去の不幸を振りかえり、今はその故に感謝を限りなくしている。正に、この本の頂点に達する。

O, thank thy Destiny for these; thankfully bear what yet remain: thou hadst need of them; the Self in thee needed to be annihilated. By benignant fever-paroxysms is Life rooting out the deep-seated chronic Disease, and triumphs over Death. On the roaring billows of Time, thou art not engulfed

but borne aloft into the azure of Eternity. Love not Pleasure; love God. This is the EVERLASTING YEA, wherein all contradiction is solved: wherein whoso walks and works, it is well with him. ⑤

(オウ、患難の故に汝の運命に感謝せよ。感謝して猶来たるべきものを耐えよ。汝にはそれが必要なのだ。汝の中に存する自己は滅去される必要があるのだ。優しい熱の発作によって、人生は根深い慢性の病を根絶しつつある。吠え猛る時の大波に汝は吸い込まれず、永遠の青空の中へと高く運ばれた。快楽を愛するな。神を愛せよ。これこそあらゆる矛盾が解決される「永遠の肯定」である、その中に歩み、働く者は誰でもそれで申し分ない。)

鬼薨氏の言う「永遠の肯定」は結局イエス・キリストを信じる信仰に他ならない。一八二五—二六年、ホッダム・ヒルでカーライルは平和と喜びの時を過ごした。その時以来彼の新しい道德的平静が定まった。一八二四年バーミンガムへの訪問や友人 Badans の影響が以前にもまして、彼の宗教的疑いをより活動的な信仰へと向けていた。田舎の静寂の中でジェイン・ウエルシュとの婚約がなった後の心の静謐の中で、彼が生きている限り、持続した信仰への必須の核を所有したと知るようになった、と L・カザミヤンは説明する。真に、先にも触れた通り、イヤン・キャンベルは「彼の夜空に輝く唯一の明るい星は、いまやジェイン・ウエルシュであり、彼女とのますます深まりつつあった親交は『永遠の否定』の暗黒をすっかり払いのけてくれた^⑥」と言う。しかし、単に女性への愛あるいは女性からの愛が男性を常にこのように有意義に働きかけるのではない。女性の資質はさておいて、男性—カー

ライル側の苦闘が必要である。「サーターの中に記された靈的苦闘のこの第三段を生命あふれるものにした力は、不安と疑惑と罪意識に悩まされた何年かを抜け出した歓喜から生まれたものである。それは猛烈な勉強と鍛練の末に闘いとられたものである」とキャンベルは言う。この意味に於いて女性はいくも第二次的存在で、男性の光を、生命を引導するものであらう。ミルトンが描くサムソン、アダムの再生にもこれが言える。

鬼糞氏はその全ての不幸故に神への愛が人生に於ける最大・最善のものであるという確心に達した。神の愛には全ての矛盾が解決される。快樂を愛せず、神を愛せよ、とは幸福を求めず、祝福を求めよ、ということである。

「幸いなるかな (blessed are...)」で始まるイエスの山上の美訓の意味が氏に解され、感得されたのである。ポーター夫人『少女パレアナ』は人々に祝福の意味、それを得る方法を教える。少女パレアナの「喜びの遊び」の喜びは幸福が与えられるところから得られるのではなく、幸福が与えられないところから得られている。この喜びは祝福の喜びである。今の氏がこの『少女パレアナ』を読めば、その真意を認め、大いに感激したと思われる。このように、祝福は幼い子供にも与えられるものである。

これはカーライルの胸に感じられるものであって、意見・学説ではない。新戸辺稲三は学説や意見がいかにもろいものか例をあげている。^⑧彼は言う「何か一つの Action をやると、それが為に今までに骨折りを重ねてきた哲学思想が、玩具の大厦高樓を紙で積み立てたように直ぐにがらがらと打ちこわれてしまう。面白いものだ。人間というものは Opinion では成り立たない」と。ここに信仰が必要である。しかし、いわゆる信仰だけで、「人間の全体的義務」(Whole Duty of Man) たり得ず、未だ「半分の義務」(Half Duty) 或いは「受動的半分」(passive Half) に過ぎない。人は現実の世界で「信仰」(Belief) を証明しなければならない。確信は行為に変わるべきも

のである。

‘But indeed Conviction, were it never so excellent, is worthless till it convert itself into Conduct.’^⑧

(しかし成程確信が、たとい極めて優れていても、それが「行為」に変わるまでは無価値である。)

この考えは逆説的に次のように言われている。^⑨

“Doubt of any sort cannot be removed except by Action.”^⑩

(如何なる類の疑惑も「行動」による以外除去され得ない。)

苦しみながら暗中で又不確かな光の中で模索している者、又夜明けが白日となるように心をふりしぼって祈っている者には「汝の一番近い義務を果たせ」(“Do the Duty which lies nearest thee”)の格言は測り知れない価値を持つであろう。次にするべき義務は明らかとなる。

今自分が立っているこのみずばらしい、悲惨な、妨げられた、軽蔑すべき現実の中に我々の理想(Ideal)がある。情実はその理想を形成するべき材料にすぎない。この教えを新渡戸は面白い例で説明している、

八百屋の小僧ならば朝から晩まで大根と午莠を自分の situation とせねばならぬこともある。又小さな学校の先生ならば朝から晩まで相手にする鼻垂らし小僧が situation かも知れない。或は国家という大きな問題もあり、種々の situation がある。即ち材料は何でもその材料を用いて、経済にあげるような料理を為さねばならない。

皆、同一の理想——神の目にはかく映る——であるが故に、カーライルは次の如く言う、

O thou that pinest in the imprisonment of the Actual, and criest bitterly to the gods for a kingdom wherein to rule and create, know this of a truth: the thing thou seekest is already with thee, "here or nowhere," couldst thou only see!

(現実の牢獄の中で心を痛め、自分に王国をつくり、支配しようと激しく天に祈っている者よ、このことを悟れ、汝が求めているものは既に汝にある、「ここより他はない」、「見さえすれば!」)

混沌界に「光あれ!」と神言い給えば光ありき。心にかかる思いが生じてくれば今までは暗黒の荒廢した混沌が、花咲き、豊穰となり、天の憐れまれる世界となった。

トイフェルスドレックはこの章の最後のパラグラフで次のように言っている、"Be no longer a Chaos, but a

World, or even Worldkin.” (混沌であるな、世界となれ、どんな小さい世界であつても)と。“Produce! Produce!” 造れ! 造れ! どんなに小さい生産でもよいから、神の名において造れ! これが汝が持ち得る全てである。神の意志の至高の命令は「労働の福音」(the gospel of labor)である。Out with it, then! それだから、それを出し尽せ! Up, up やれ、やれ! Whatsoever thy hand findeth to do, do it with whole might. 汝の手が為すべく見出し出すものは何でもや力一杯やれ。Work while it is Called Today; for the Night cometh, wherein no man can work. 今日という日に働け、夜が来て、人は働けなくなるから。

新渡戸稲三はこの一章はカーライルの全思想を表わしていると言う。右の内容は説明の余地はほとんどないであろう。彼の思想の最も中心となるものは Self-annihilation (自己否定) である。これによって古きアダムから新らしきアダムを着るようになり、永遠の否定から永遠の肯定へと、自己の実存の混沌から世界へと、力の浪費から生産へと移ることが出来たのである。

四、結 語

カーライル (一七九五—一八八一) が生きた時代も、否、人類の歴史が始まって以来、人間の時代は^{フイオイン}変わらな^イい。カーライルが苦闘した物質文明は今日心ある者が苦闘して克服しなければならぬ対象である。自然や歴史を論理的に科学的に追求せんとすれば人は無神論に着き、啓示を通して解明せんとする者は真の認識に到る。哲学者カントがその『判断力批判』で追求しているのはこの問題であつた。彼は述べる、

自然の合目的性を説明する原理として自然の単なる機械的組織を想定する限り、世界における物は何のために存在するのか、という問題は生じ得ない。このような観念論的体系において問題となるのは、物の自然的可能だけだからである……

と。彼は自然神学から道徳神学へと考えを進め、深めていき、更に道徳的法則を通して、「道徳的な世界創造者即ち神」に到達した。カーライルが『衣裳哲学』で説いたのも同じく、神の實在と救いに他ならない。

人は単細胞といえども生物を創造することはできない。人類が誇る原子力は既に太陽の核融合反応に先んじられている。人が物質文明を誇っても宇宙の創造主に勝つことはできない。高級車と道端に咲く野の花といずれが優れているか、後者にきまっている。人間としても神の創造物のパラゴンである。ハムレットの言う通りである、

What a piece of work is a man, how noble in reason, how infinite in faculties, in form and moving, how express and admirable in action, how like an angel in apprehension, how like a god—the beauty of the world; the paragon of animals; (*Hamlet*, II. ii. 310ff.)

その為すところも優れていよう。しかし、神の創造と人間のそれを比較することはできない。

しかして、人間が人間たる所以は「新しき天と地」の相続者であることである。そこに到る道がカーライルの『衣裳哲学』に示されている。筆者は不十分ながらその道をたどってきたにすぎない。

〔付記〕本論は『人文学論集』16号（一九八二年十一月）の拙論（同論題）に続くもので合わせて読みたい。

註

- ④② 研究社小英文学叢書版、一二三頁による。
- ④③ *Works*, p. 138.
- ④④ *Ibid.*, p. 139.
- ④⑤ *Ibid.*, p. 141.
- ④⑥ *Ditto.*
- ④⑦ *Ditto.*
- ④⑧ イヤン・キャンベル、前掲書、五八―五九頁参照。
- ④⑨ 同、四九―五〇頁参照。
- ⑤① 『バスターロッチー全集』1（平凡社、昭和四九年）、一六―二〇頁参照。尚、妻アンナ・シュルツへの書簡については『全集』7、三三〇―三五二頁参照。
- ⑤② 石田憲次、前掲書、一七二頁。
- ⑤③ 同、一七二頁。
- ⑤④ ロレン・ロラン著 蛸原徳夫訳『ミレー』（岩波文庫、昭和四四年）二八頁参照。
- ⑤⑤ *Works*, p. 142.
- ⑤⑥ Louis Cazamian, *op. cit.*, p. 117.
- ⑤⑦ *Works*, p. 142.
- ⑤⑧ *Ibid.*, p. 143.
- ⑤⑨ Cf. *Paradise Lost*, XI, 1—8.
- ⑤⑩ *Works*, p. 143.
- ⑤⑪ 工藤好美、前掲書、一三七頁。

- ⑥① 土居光知解説・注釈、カーライル『衣裳哲学』（研究社、昭和三九年）一八一頁の注。
- ⑥② 同、一八一頁。
- ⑥③ 工藤好美、前掲書、五九頁。
- ⑥④ *Works*, p. 144.
- ⑥⑤ *Ditto*.
- ⑥⑥ イヤン・キャンベル、前掲書、一五二頁。
- ⑥⑦ *Works*, p. 145.
- ⑥⑧ ローマ人への手紙 8 の 28。
- ⑥⑨ *Works*, p. 145.
- ⑦① イヤン・キャンベル、前掲書、四九—五〇頁。
- ⑦② 同、五八頁。
- ⑦③ 新渡戸稲三、前掲書、一六五—一六七頁参照。
- ⑦④ 同、一六五頁。
- ⑦⑤ *Works*, p. 147.
- ⑦⑥ *Ditto*.
- ⑦⑦ 新渡戸稲三、前掲書、一七〇頁。
- ⑦⑧ *Works*, p. 148.
- ⑦⑨ *Ditto*.
- ⑧① Louis Cazamian *op. cit.*, p. 117.
- ⑧② 新渡戸稲三、前掲書、一七一頁。
- ⑧③ 同、二四八—二四九頁参照。
- ⑧④ カント著 篠田英雄訳『判断力批判』（岩波文庫、一九七七）、一四〇頁。

84 同、一七四頁。

参 考 文 献

(一) リ キ ス ト

Thomas Carlyle, *Sartor Resartus and others*, Dent London, 1973.

土居光知解説・注釈、カーライル『衣裳哲学』、研究社、昭和三十九年。

(二) 研究・批評・伝記

Jules Paul Seigel ed. *Thomas Carlyle: The Critical Heritage*, London: Routledge & Kegan Paul, 1971.

Louis Cazamian, *Carlyle*, translated by E. K. Brown, Archon Books, 1966.

Gerry H. Brooks, *The Rhetorical Form of Carlyle's Sartor Resartus*, University of California Press, 1972.

Edwald Flügel, *Thomas Carlyle's Moral and Religions Development*, translated by Jessica Gilbert Tyler, Haskell House Publishers Ltd., 1971.

(三) 邦 文 文 献

工藤好美 *Carlyle* 研究社、昭和五五年復刻版。

『英語青年』第一二七卷第八号。

新渡戸稻三全集第九卷、教文館、昭和四四年。

矢内原忠雄『土曜学校講義』第四卷、みすず書房、一九七二年。

内村鑑三信仰著作全集5、教文館、昭和三十九年。

石田憲次『基督敎的文学観』、研究社、昭和七年。

石田憲次『二度生まれる』あぼろん社一九八一年。

カント著、篠田英雄訳『判断力批判』、岩波文庫、一九七七年。

(四) そ の 他

『ヘスタロッチ全集』1・7、平凡社、昭和四九年。

Shakespeare, *Hamlet* 大山俊一註釈、篠崎書林、昭和四一年。